演題番号：C3

上腕骨遠位端に認め、進行が緩徐で診断に苦慮した骨肉腫の犬の１例

○船崎正治[1)]，井上翔太[1)]，加藤智彩[1)]，木原　翠[1)]，中森正也[1) 2)]

[1)] 乙訓どうぶつ病院，[2)] 京都動物医療センター

1. はじめに：犬の骨肉腫は最も一般的な原発性骨腫瘍であり、75％が四肢、25％が軸骨格に発生する。強い疼痛や骨の腫脹が見られ、四肢に発生した場合跛行を伴うことが多い。通常進行は早く、無処置での生存期間は約４～６ヶ月、断脚と化学療法での生存期間中央値は８～12ヶ月となる。今回、健康診断時に上腕骨遠位に骨破壊および増生像が認められたものの骨生検で診断がつかず、経過観察中にＸ線検査で治癒傾向を認めたため、診断に苦慮した症例に遭遇した。その概要を報告するとともに診断について検討した。

2. 材料と方法：ミニチュアシュナウザー、7.7kg、去勢雄、８歳。健康診断で来院時に、Ｘ線検査で偶発的に右上腕骨遠位の骨破壊および増生像が認められたため、CT検査および骨生検を実施したが、骨肉腫と診断がつかなかった。疼痛や跛行などの臨床症状が認められず、断脚に対して飼主の同意が得られなかったため、Ｘ線検査により経過観察することとなった。第70、82、96病日でのＸ線検査では骨融解像が第１病日と比較して改善した。その後はＸ線検査で骨融解像が徐々に進行し、第399病日に右前肢の疼痛、その後間欠的な疼痛や跛行を認めたため、第582病日に再度CT検査および骨生検を実施し、骨肉腫と診断した。

3. 結　果：第599病日に断脚、第611病日から第674病日の間に計４回化学療法を実施した。現在第864病日に至るまで、Ｘ線検査にて転移は認められていない。

4. 考察および結語：今回、症状もなくＸ線検査でも一時的に改善を示した骨肉腫に遭遇し、１回目の生検で診断がつかなかったために断脚および化学療法を実施するタイミングが遅くなってしまった。本症例は発見から断脚まで599日経過したにもかかわらず、断脚直前のCT検査で明らかな転移を認めず、第864病日時点までの経過は良好である。発生部位によって予後が異なる骨肉腫において、上腕骨遠位での骨肉腫の発生報告は少ないが、一般的な骨肉腫に比べて進行が遅い可能性が示唆された。また、本症例のように進行が緩徐な場合、画像検査による経過の判断は困難であった。骨肉腫は断脚および化学療法の実施により転移の遅延が証明されており、早急な診断・治療が推奨される。そのため、１回目の生検で診断がつかなくても、飼主の納得を得て経過観察中に複数回の生検を実施することが重要であると考える。